

令和7年度  
全国学力・学習状況調査  
札幌市 実施報告書

令和7年8月  
札幌市教育委員会

## 【目次】

### I 令和7年度全国学力・学習状況調査の概要

1 目的	概要－1
2 調査対象	概要－1
3 調査の内容	概要－1
4 実施日	概要－1

### II 札幌市の調査結果の概要

1 本市の調査対象校数及び調査を受けた人数等	概要－2
2 教科に関する調査結果の概要	概要－2～5
3 児童生徒質問の結果の概要	概要－6～13

### III 調査結果の活用について

1 活用の方針	活用－1
2 調査結果の公表の仕方	活用－1
3 札幌市の現状を踏まえた今後の取組	活用－2

### IV 教科に関する調査の結果と分析

1 小学校国語	教科－1・2
2 小学校算数	教科－3・4
3 小学校理科	教科－5・6
4 中学校国語	教科－7・8
5 中学校数学	教科－9・10
6 中学校理科	教科－11～14

### V 児童生徒質問調査の結果

1 児童質問調査結果一覧<小学校>	質問－1～7
2 生徒質問調査結果一覧<中学校>	質問－8～13
3 頻度等を問う質問項目における肯定的な回答とする基準	質問－14
4 児童生徒質問項目一覧	質問－15～18

# I 令和7年度全国学力・学習状況調査の概要

## 1 目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

なお、本調査により測定できるのは学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面であることに十分に配慮することが必要である。

## 2 調査対象

小学校第6学年及び中学校第3学年

## 3 調査の内容

### (1) 教科に関する調査【国語、算数・数学、理科】

調査問題では以下の①と②を一体的に出題している。

①	②
<ul style="list-style-type: none"><li>・身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容</li><li>・実生活において不可欠であり常に活用できようになっていることが望ましい知識・技能等</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力</li><li>・様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力</li></ul>

### (2) 生活習慣や学習環境等に関する質問調査

児童生徒に対する調査	学校に対する調査
学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査	指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査

## 4 実施日

令和7年4月17日（木）

※ただし、ネットワーク環境を考慮して日程分散を行う関係上、次の調査は期間内で学校ごとに指定された1日で実施している。

【小学校児童質問調査】 4月18日（金）～30日（水）

【中学校理科及び生徒質問調査】 4月14日（月）～17日（木）

## II 札幌市の調査結果の概要

### 1 本市の調査対象校数及び調査を受けた人数等

校種	対象学年	調査対象校数	調査対象校における 対象学年の在籍数	調査を受けた人数及び参加率	
小学校	第6学年	200 校	14,479 人	13,592 人	93.9 %
中学校	第3学年	99 校	14,633 人	12,914 人	89.1 %
合計		299 校	29,112 人	26,506 人	91.4 %

※小学校には義務教育学校、特別支援学校小学部を、中学校には義務教育学校、中等教育学校、特別支援学校中学部を含む。

※「調査対象校における対象学年の在籍数」は、4月8日現在のもの。

※「調査を受けた人数」は、実施日に回収した解答用紙が最も多かった教科の解答用紙の枚数で算出している。

### 2 教科に関する調査結果の概要

#### (1) 中学校理科を除く教科に関する調査の平均正答率

##### 【小学校】

	国語	算数	理科
札幌	66 (66.4)	58 (57.8)	56 (56.3)
全国	66.8	58.0	57.1

##### 【中学校】

	国語	数学
札幌	56 (55.5)	51 (51.2)
全国	54.3	48.3

※札幌市の平均正答率は、上段が文部科学省から提供された値、下段の（ ）内は、札幌市が独自に算出した値。

国語、算数、理科のいずれも、全国平均正答率と「ほぼ同程度であるが、やや下回っている」

国語、数学のいずれも、全国平均正答率と「ほぼ同程度であるが、やや上回っている」

※「ほぼ同程度」は、全国の平均正答率と比較して±3ポイントの範囲

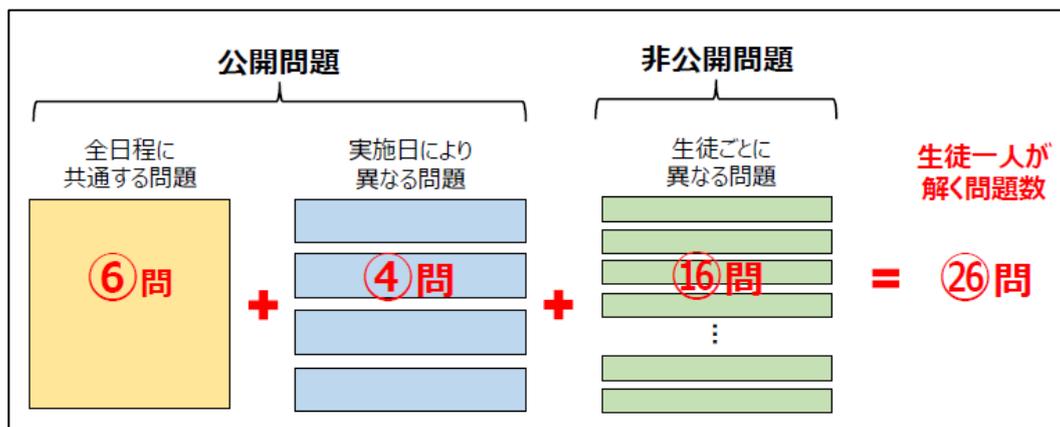
## 重要

### <平均正答率の見方・取扱い方>

- 平均正答率は、各設問の正答率を平均した値です。集団の特性を表す一つではありますが、本調査の目的からすると、設問ごとの状況等を詳しく分析する必要があります。
- 本調査における平均正答率1ポイントの差は、平均正答数に換算すると0.14~0.17問の差に過ぎません。したがって、数値の細かな差のみに着目するのではなく、全体の傾向を大きく捉えたり、無解答率や誤答率等も含めて、成果と課題を丁寧に捉えたりすることが必要です。
- 調査問題は、年度によって出題内容も異なることなどから、過年度の結果と単純に比較することは適当でないことにも留意が必要です。

## (2) 中学校理科に関する調査の結果について

今年度の中学校理科の調査においては、IRT（項目反応理論）という、国際的な学力調査等で採用されているテスト理論が用いられている。これにより、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じ尺度で比較することが可能となるため、以下のように、中学校理科の調査では、生徒1人あたり、公開問題10問と非公開問題16問の合わせて26問が出題されている。



[文部科学省提供資料より]

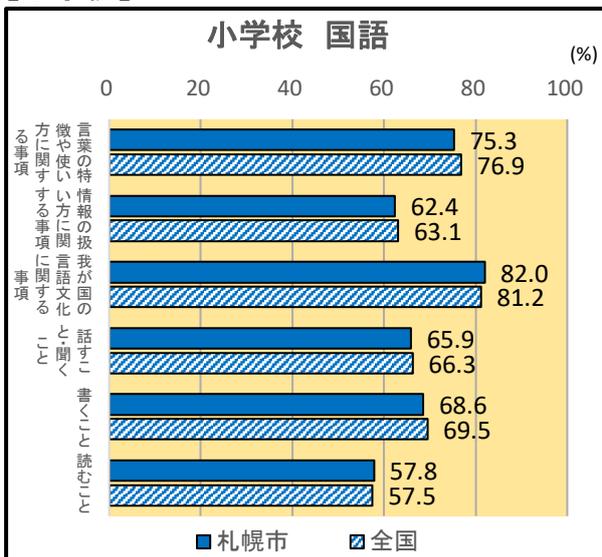
本調査においては、IRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点として表されたIRTスコアで結果が示されている。IRTスコアを1～5の5段階に区切ったものが生徒の個人票で、IRTバンドとして示されている。

	平均IRTスコア
札幌	515
全国	503

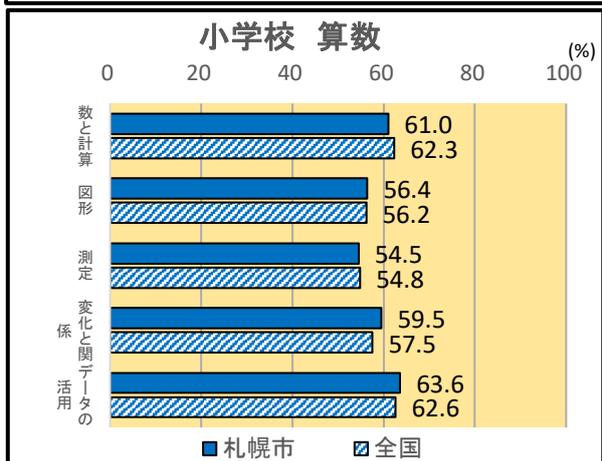
※IRTスコア及びIRTバンドの算出は、公開問題だけではなく、非公開問題の回答結果も用いて算出されている。

(3) 中学校理科を除く各教科領域別平均正答率（

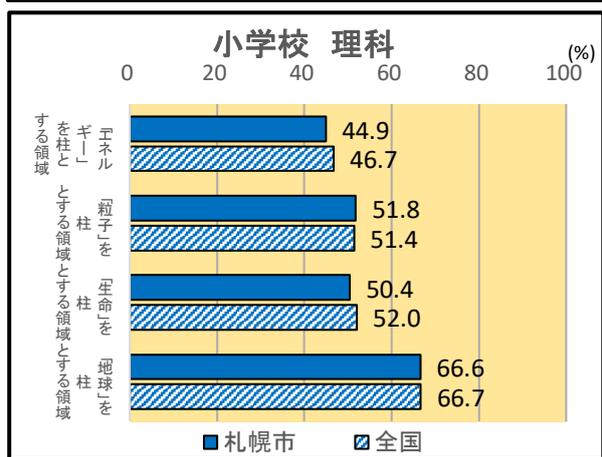
【小学校】



小学校「国語」は、「我が国の言語文化に関する事項」と「読むこと」において、全国の平均正答率と比較して、±3ポイントの範囲内で、「ほぼ同程度であるが、やや上回っている」。その他の領域において、全国の平均正答率と比較して、±3ポイントの範囲内で、「ほぼ同程度であるが、やや下回っている」。



小学校「算数」は、「数と計算」領域と「測定」領域において、全国の平均正答率と比較して、±3ポイントの範囲内で、「ほぼ同程度であるが、やや下回っている」。その他の領域においては、全国の平均正答率と比較して、±3ポイントの範囲内で「ほぼ同程度であるが、やや上回っている」。

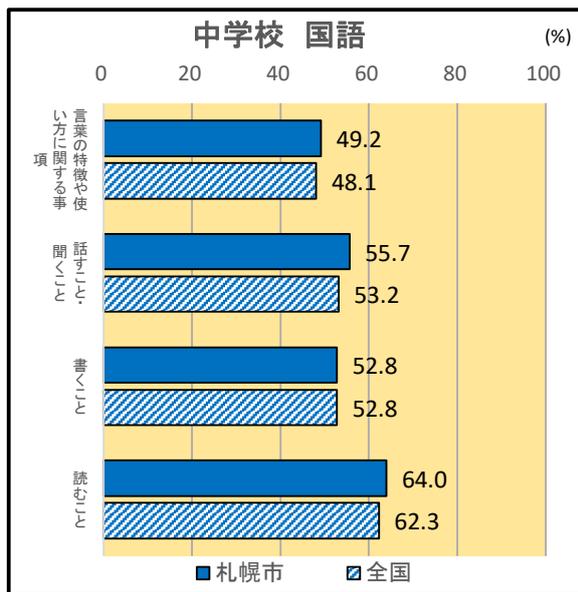


小学校「理科」は、「粒子」を柱とする領域において、全国の平均正答率と比較して、±3ポイントの範囲内で、「ほぼ同程度であるが、やや上回っている」。その他の領域においては、全国の平均正答率と比較して、±3ポイントの範囲内で、「ほぼ同程度であるが、やや下回っている」。

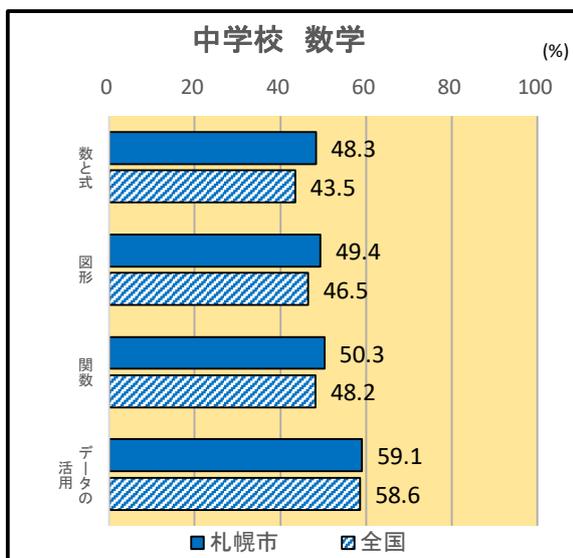
- ◇国語では、「時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くこと」などに成果が見られた。
- ◆国語では、「目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること」などに課題が見られた。
- ◇算数では、「伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすこと」などに成果が見られた。
- ◆算数では、「異分母の分数の加法の計算をすること」などに課題が見られた。
- ◇理科では、「水の蒸発について、温度によって水の状態が変化するという知識を基に、概念的に理解していること」について成果が見られた。
- ◆理科では、「身の回りの電気を通す物と磁石に引き付けられる物との差異点や共通点について理解すること」などに課題が見られた。

## 【中学校】

※中学校理科はIRTを用いた実施となり、領域ごとの平均正答率などは示されていない。



中学校「国語」は、「書くこと」の事項・領域で、全国の平均正答率と「ほぼ同程度」である。その他の事項・領域において、全国の平均正答率と比較して、±3ポイントの範囲内で、「ほぼ同程度であるが、やや上回っている」。



中学校「数学」は、「数と式」領域において、全国の平均正答率と比較して、「上回っている」。その他の領域においては、全国の平均正答率と比較して、±3ポイントの範囲内で「ほぼ同程度であるが、やや上回っている」。

- ◇国語では、「資料や機器を用いた話し方の工夫を捉えること」、「自分の考えが明確になるように、論理の展開に注意して、話の構成を工夫すること」などに成果が見られた。
- ◆国語では、「相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫すること」などに課題が見られた。
- ◇数学では、「素数の意味を理解すること」、「事柄が常に成り立つとは限らないことを説明する場面において、反例をあげること」などに成果が見られた。
- ◆数学では、「目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明すること」などに課題が見られた。
- ◇理科では、「抵抗に関する知識が概念として身に付いていること」、「気体の性質に関する知識が概念として身に付いていること」などに成果が見られた。
- ◆理科では、「考察をより確かなものにするために、音に関する知識及び技能を活用して、変える条件に着目した実験を計画し、予想される実験の結果を適切に説明すること」などに課題が見られた。

### 3 児童生徒質問の結果の概要

※質問P以外の数値は、肯定的な回答をした児童生徒質問の割合を示す  
※実施年度の内、最初の年度は該当設問の初出の年度を示す

#### 《人間尊重の教育に係る質問》

A <u>自分には、よいところがあると思う子ども</u> の割合は、前回調査と比べ、小学校は3.0ポイント、中学校は2.6ポイント増加している。[質問番号-5]	実施年度	小学校		中学校	
		札幌	全国	札幌	全国
	平成19年度	70.7	71.5	62.5	60.5
	令和6年度	82.4	84.1	83.1	83.3
	令和7年度	<b>85.4</b>	86.9	<b>85.7</b>	86.2

B <u>先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う子ども</u> の割合は、前回調査と比べ、小学校は4.6ポイント、中学校は2.4ポイント増加している。[質問番号-6]	実施年度	小学校		中学校	
		札幌	全国	札幌	全国
	平成26年度	76.9	79.7	73.6	74.1
	令和6年度	87.8	89.9	89.5	90.4
	令和7年度	<b>92.4</b>	92.2	<b>91.9</b>	92.2

C <u>困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる子ども</u> の割合は、前回調査と比べ、小学校は5.0ポイント、中学校は6.8ポイント増加している。[質問番号-10]	実施年度	小学校		中学校	
		札幌	全国	札幌	全国
	令和4年度	64.2	68.1	61.8	66.6
	令和6年度	64.8	67.1	66.0	67.5
	令和7年度	<b>69.8</b>	70.6	<b>72.8</b>	73.2

D <u>学校に行くのは楽しいと思う子ども</u> の割合は、前回調査と比べ、小学校は1.3ポイント、中学校は2.3ポイント増加している。[質問番号-12]	実施年度	小学校		中学校	
		札幌	全国	札幌	全国
	平成26年度	85.9	86.6	79.8	82.4
	令和6年度	84.1	84.8	82.3	83.8
	令和7年度	<b>85.4</b>	86.5	<b>84.6</b>	86.1

E <u>普段の生活の中で、幸せな気持ちになることがある子ども</u> の割合は、前回調査と比べ、小学校は1.7ポイント、中学校は1.8ポイント増加している。[質問番号-15]	実施年度	小学校		中学校	
		札幌	全国	札幌	全国
	令和5年度	90.0	91.0	85.3	86.8
	令和6年度	90.7	91.7	89.0	89.8
	令和7年度	<b>92.4</b>	93.0	<b>90.8</b>	91.6

◇各学校において、札幌市学校教育の「基盤」である、「人間尊重の教育」を推進し、子ども一人一人が「自分が大切にされている」と実感できる学校づくりを進めてきた成果が表れてきていると考えられる。

「さっぽろっ子自治的な活動に係る質問」

<p><b>F</b> あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決を決めていると思う子どもの割合は、前回調査と比べ、小学校は 0.8 ポイント増加し、中学校は 1.4 ポイント減少している。〔質問番号－41〕</p>	実施年度	小学校		中学校	
		札幌	全国	札幌	全国
	平成31年度	68.3	74.0	63.8	71.6
	令和5年度	73.8	77.2	71.6	77.9
	令和6年度	79.3	84.2	84.5	86.3
	令和7年度	<b>80.1</b>	83.3	<b>83.1</b>	84.3

<p><b>G</b> 学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいると回答した子どもの割合は、前回調査と比べ、小学校は 1.0 ポイント、中学校は 2.3 ポイント減少している。〔質問番号－42〕</p>	実施年度	小学校		中学校	
		札幌	全国	札幌	全国
	平成31年度	68.2	73.4	59.1	65.6
	令和5年度	73.0	75.7	64.4	71.6
	令和6年度	79.2	82.5	77.9	80.6
	令和7年度	<b>78.2</b>	80.8	<b>75.6</b>	77.3

◇昨年より減少傾向が見られたものの、令和5年度以前と比べると肯定的な回答の割合が増加していることや、小中ともに全国との差が縮まっていることから、さっぽろっ子宣言「プラスのまほう」に基づいた「さっぽろっ子自治的な活動」を推進してきた成果が表れてきていると考えられる。

「課題探究的な学習に係る質問」

〈主体性〉の視点

<p><b>H</b> 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思う子どもの割合は、前回調査と比べ、小学校は 0.3 ポイント増加し、中学校は 0.7 ポイント減少している。〔質問番号－32〕</p>	実施年度	小学校		中学校	
		札幌	全国	札幌	全国
	平成30年度	74.2	76.7	69.1	73.8
	令和5年度	77.4	78.8	74.2	79.2
	令和6年度	79.0	81.9	77.2	80.3
	令和7年度	<b>79.3</b>	80.3	<b>76.5</b>	77.7

### 〈個別探究〉の視点

I 授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていたと思う子どもの割合は、前回調査と比べ、小学校は 0.9 ポイント、中学校は 0.4 ポイント増加している。 [質問番号-34]	実施年度	小学校		中学校	
		札幌	全国	札幌	全国
	令和3年度	79.2	81.4	67.6	74.3
	令和5年度	79.9	82.9	67.3	74.9
	令和6年度	81.6	84.3	77.1	80.9
	令和7年度	<b>82.5</b>	83.4	<b>77.5</b>	79.3

### 〈協働探究〉の視点

J 授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にしてお互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいると回答した子どもの割合は、前回調査と比べ、小学校は 1.8 ポイント、中学校は 0.1 ポイント増加している。 [質問番号-39]	実施年度	小学校		中学校	
		札幌	全国	札幌	全国
	令和6年度	89.2	91.6	91.5	92.3
	令和7年度	<b>91.0</b>	91.9	<b>91.6</b>	91.9

### 〈リフレクション〉の視点

K 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていると思う子どもの割合は、前回調査と比べ、小学校は 0.3 ポイント増加し、中学校は 2.9 ポイント減少している。 [質問番号-36]	実施年度	小学校		中学校	
		札幌	全国	札幌	全国
	令和3年度	75.3	78.3	71.9	74.6
	令和5年度	74.4	77.4	62.9	69.2
	令和6年度	76.8	80.8	74.9	77.9
	令和7年度	<b>77.1</b>	79.4	<b>72.0</b>	73.4

L 授業で学んだことを、次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりすることができると思う子どもの割合は、前回調査と比べ、小学校は 0.4 ポイント増加し、中学校は 3.1 ポイント減少している。  
[質問番号-37]

実施年度	小学校		中学校	
	札幌	全国	札幌	全国
令和6年度	80.6	83.7	75.9	79.0
令和7年度	<b>81.0</b>	82.5	<b>72.8</b>	74.8

### 〈自分の考え〉の視点

M 授業では、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表したと思う子どもの割合は、前回調査と比べ、小学校は 2.4 ポイント増加し、中学校は 1.1 ポイント減少している。 [質問番号-31]	実施年度	小学校		中学校	
		札幌	全国	札幌	全国
	平成28年度	59.1	64.2	52.7	57.7
	令和5年度	59.5	63.7	56.7	62.1
	令和6年度	63.8	67.6	63.2	64.8
	令和7年度	<b>66.2</b>	68.6	<b>62.1</b>	63.0

<p>N 授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていたと回答した子どもの割合は、前回調査と比べ、小学校は 0.8 ポイント増加し、中学校は 3.2 ポイント減少している。 [質問番号-33]</p>	実施年度	小学校		中学校	
		札幌	全国	札幌	全国
	令和4年度	68.8	72.2	60.9	67.4
	令和5年度	71.5	74.4	59.8	69.1
	令和6年度	75.9	79.6	70.5	75.4
	令和7年度	<b>76.7</b>	77.8	<b>67.3</b>	70.6

### 〈教師の関わり〉の視点

<p>O 先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思う子どもの割合は、前回調査と比べ、小学校は 2.0 ポイント増加し、中学校は 0.5 ポイント減少している。 [質問番号-38]</p>	実施年度	小学校		中学校	
		札幌	全国	札幌	全国
	平成28年度	82.4	84.8	69.5	74.1
	令和5年度	89.4	93.0	84.4	88.9
	令和6年度	82.9	87.9	81.6	84.9
	令和7年度	<b>84.9</b>	87.4	<b>81.1</b>	83.8

- ・AAR サイクルにおける「個別探究」や「協働探究」に係る設問については、全国の数値が概ね減少傾向にある一方、札幌市においては増加の傾向が見られた。
- ・主体性やリフレクションに係る設問では、全国の数値が減少しているが、札幌市においても、中学校で同様の傾向が見られた。ただし、中学校において全国の数値との差は縮まっている。



- ◇各学校において、AAR サイクルの視点で授業改善を図り、子ども一人一人の主体性を大切にしながら多様な学びを推進してきた成果が表れてきていると考えられる。
- ◆子どもが自らの学びや成長を振り返るリフレクションの場面をより充実させていく必要がある。

- ・自分の考えを発表したり、まとめたりする学習について、小学校において昨年度と比較して数値が増加しているものの、小学校・中学校ともに全国よりも低い数値となっている。
- ・教師の関わりについて、全国の数値がわずかに減少している中、札幌市では小学校において数値が増加した。

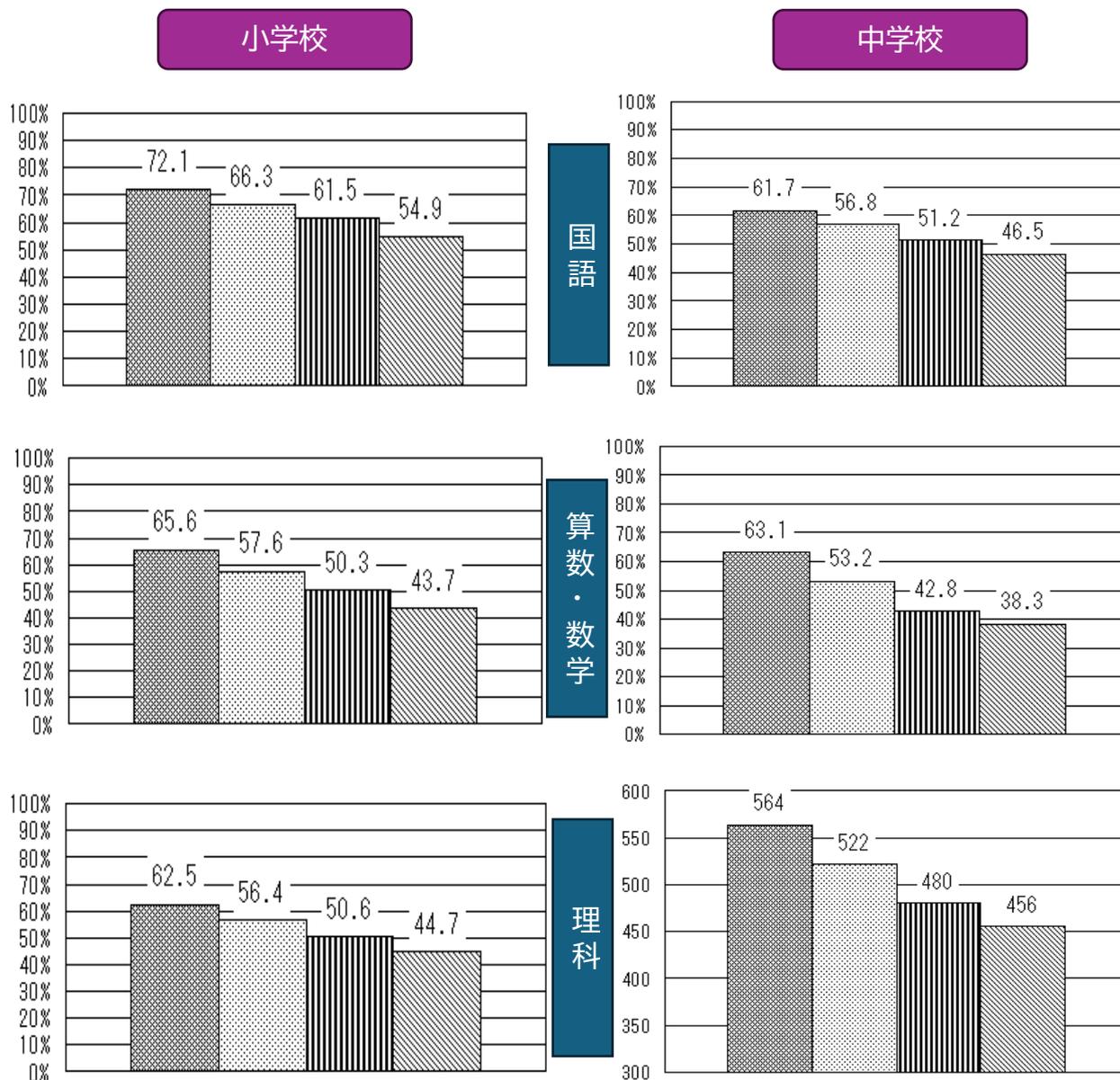


- ◆改めて「学びのコントローラーをもっているのは子ども自身」というコンセプトを基に、子ども自身が課題に対して主体的に探究し、自分の考えをもちながら学び進められるような単元や題材の構成を教師が行う必要がある。

児童生徒質問「授業では、各教科等で学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動をおこなっていた」の選択肢ごとの教科の正答率・スコア

※グラフの左の数値（％）は正答率を表す。ただし、中学校理科は IRT スコアを表す。

※各グラフは左から順に、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」「どちらかと言えば当てはまらない」「当てはまらない」と回答した児童生徒について表している。

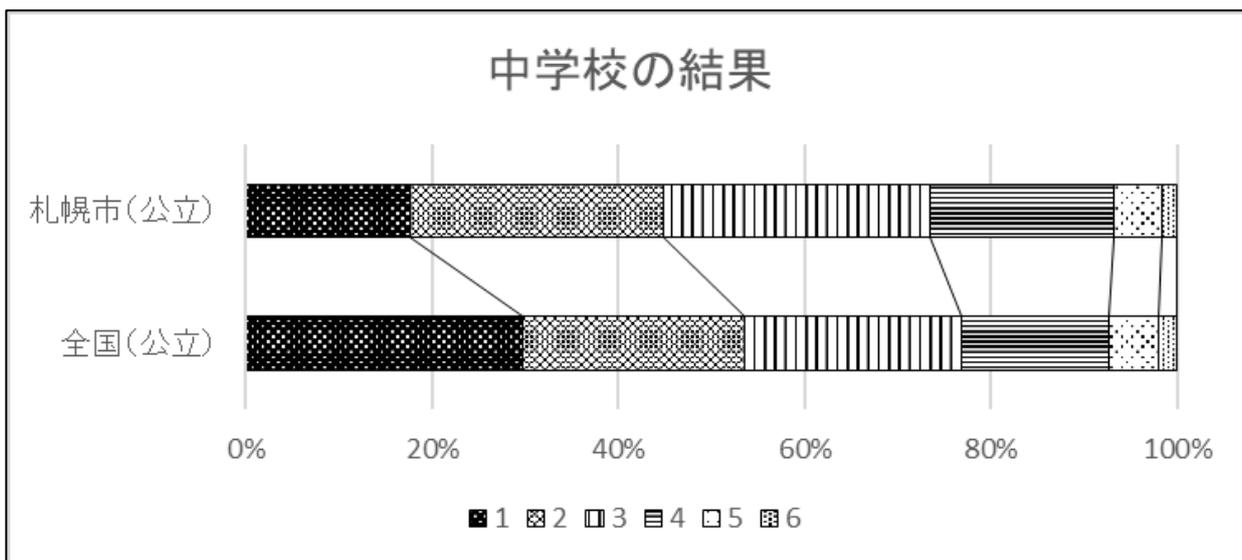
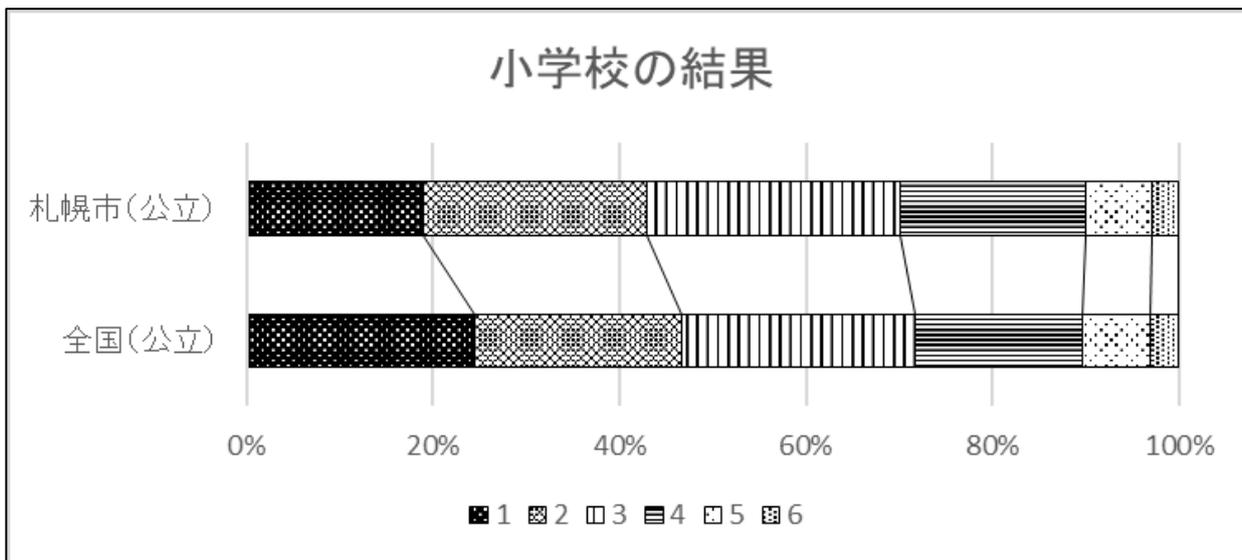


「授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていた」と、より肯定的に回答している児童生徒は、小中ともにどの教科においても正答率・IRT スコアが高い傾向にある。このことから、単元等において子どもが主体的に探究を進める中で、自分の考えをもてるような機会を作ることなどが必要となる。

「ICT 活用に係る質問」

P 授業では、PC・タブレットなどの ICT 機器を、どの程度使用しましたか。 [質問番号-28]

- 1 ほぼ毎日（1日に複数の授業で活用）      2 ほぼ毎日（1日に1回くらいの授業）  
 3 週3回以上                                      4 週1回以上                                      5 月1回以上                                      6 月1回未満



◆肯定的な回答の割合(回答番号1~4)については、小中ともに全国の状況を上回っているが、「ほぼ毎日」使用している割合は全国の状況より下回っており、端末の活用を一層進めていく必要がある。

Q [質問番号-29]

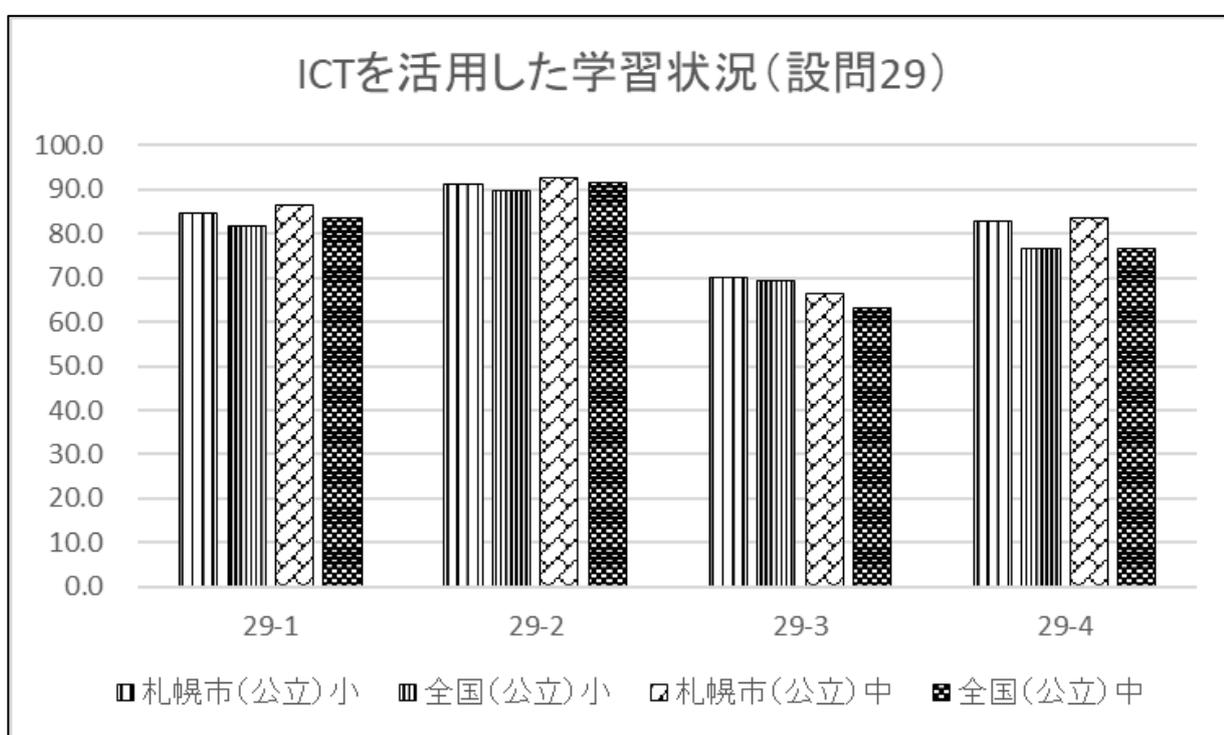
29-1 PC・タブレットなどの ICT 機器で文章を作成する(文字、コメントを書くことなど)ことができると思う。

29-2 インターネットを使って情報を収集する(検索する、調べるなど)ことができると思う。

29-3 PC・タブレットなどの ICT 機器を使って情報を整理する(図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる)ことができると思う。

29-4 PC・タブレットなどの ICT 機器を使って学校のプレゼンテーション(発表のスライド)を作成することができると思う。

※グラフは肯定的な回答の割合を表し、グラフの左の数値(%)は正答率を表す。



◇どの設問においても、小中ともに全国の状況を上回っている。各学校において、学びの質を高め、「学ぶ力」を育成することを目的に ICT を効果的に活用してきた成果が表れてきている。

◆全国と同様の傾向であるが、情報を整理することについては他の質問より肯定的な回答の割合が低く、子どもが収集した情報について、どのように整理、分析するとよいかについて指導していくことが必要である。